

古典的プラグマティズムにおける 〈主観性/客観性〉

2022年5月22日 日本哲学会
学協会シンポジウム「プラグマティズムの再検討」

乗立雄輝（東京大学）

本発表の趣旨

- 伊藤邦武（伊藤2016）も、また次発表の白川氏、川瀬氏も指摘するように、ローティ流の主観的プラグマティズムから客観性を取り戻そうとする動きがミサク等によって展開されているというのが、現在のプラグマティズムをめぐる状況である。
- そのミサクの意図、そして議論の方向性は概ね妥当だと考えるが、プラグマティズム、特にパース哲学の「客観主義的性格」を強調しすぎることは、過剰な擁護になってしまうのではないかと危惧する。
- というのも、古典的プラグマティスト、たとえばパースとジェイムズは旧来の「主観（性）／客観（性）」の枠組みに対して懐疑的であり、この二つの概念がときに重なり合うということを主張していたからである。
- 今回、ジェイムズについてはあまり時間を割くことができないが、パースが「主観的なものが主観的なものでありながらときに、同時に客観的でもありうる」という事態をどのように考えていたのかを考察してみたい。

目次

1. 「主観的／客観的」プラグマティズムの源流
2. 可謬主義と反懐疑論
3. 「ens rationisがときにリアルである」ということ
4. 問題 — 「客観的観念論」をどう理解するか

1. 「主観的／客観的」プラグマティズムの源流

- 後にローティやミサクによって顕在化することになる「主観的／客観的」プラグマティズムの差異の源流は、パースとジェイムズがとった「心理主義」とヘーゲル（主義）への態度の差に遡ることができる。
- 大雑把に言うならば、パースは心理主義に対して強い警戒心を抱いており、思考の客観性をどのように確保するかという視点からヘーゲルに接近することになった。
- 対するジェイムズは心理主義に対する警戒心は薄く、自身の哲学が心理主義的に解釈されることにも抵抗はあまり見られない。そのこともあってヘーゲルを「主知主義者」(intellectualist)として厳しく批判する。
- その両者の差異を示すのが、字面上は似た問題を扱っているパースの『信念の確定』（1877）とジェイムズの『信じる意志』（1897）である。

パースの『信念の確定』（The Fixation of Belief, 1877）

- 信念を確定させる方法として「固執の方法」「権威の方法」「理性の方法」「科学の方法」をあげるが、長期的な視点から、耐久性と信頼性、そして客観性という点で科学の方法が最も優れていると結論づける。
- 「信念」がどのように確定されるか（もしくは破棄されるか）ということについての議論を重く見たパースにとって、ともすれば自身の主張が心理主義と見なされることに強い警戒心があった。
- その心理主義についての懸念が、パースが、哲学的な思考の出発点となったカントから、ヘーゲルへと視点を移す要因になったと考えてよい。
- （ここで詳しく述べることはできないが、パースはカントの超越論的観念論が心理主義を誘発するのではないかと危惧していたことが言葉の端々から垣間見える。その是非はともかくとして興味深い。）

ジェイムズ『信じる意志』 (*The Will to Believe*, 1897)

- 抜き差しならない倫理的（もしくはは宗教的）問題に直面したとき、客観的な根拠が乏しい場合であっても、何を信じるべきか、もしくは、信じてよいか、ということを経論する。
- パースのような長期的な視点ではなく、差し迫った局面での瞬間的な決断が念頭に置かれている。
- ジェイムズが知人に、タイトルを「信じる権利」(**The Right to Believe**)にした方がよかったかもしれないと語っていることが、この論文の性格を表している。
- ジェイムズの哲学全般にわたって心理主義に対する警戒心はあまりなく、「論理」に対する懐疑が強い。（主知主義批判）

二人の傾向の拡大解釈

- このように、プラグマティズムをめぐっての現在の主観主義的解釈と客観主義的解釈が対立している構図の源流は、パースとジェイムズのそれぞれが心理主義とヘーゲルに対してとった差に起因すると考えることもできる。
- しかし、それはパースとジェイムズの差異を拡大解釈した結果なのではないか。
- むしろ、（同じ学派としてくくられるので、ある意味で当然かもしれないが）多くの点で彼らは共通した基盤の上に立っており、それらを吟味した上で、現在のわれわれにとって受容可能なものかどうかを検討する方が実りが多いと考える。
- その共通の基盤とは、よく指摘されるように「可謬主義」「反懷疑論」の姿勢であり、そこから一つの帰結として出てくるのが、旧来の「主観（性）／客観（性）」の枠組みへの批判的視点である。

2. 可謬主義と反懷疑論

- 可謬主義と反懷疑論は、現代のプラグマティストの多くが認めている立場である。
- しかし、古典的プラグマティスト、特にパースとジェイムズが採用する可謬主義と反懷疑論は、現代のそれとはかなり趣を異にする。
- というのも、古典的プラグマティズムにおける可謬主義は（おそらくは現代の哲学者たちには受け入れがたい）「世界の可塑性」という存在論的あるいは形而上学的前提を置いており、反懷疑論は、客観性のダウングレードによって成立すると考えられるからである。
- 以下、それぞれについて説明したい。

2-1. 古典的プラグマティズムにおける可謬主義

- 古典的プラグマティズムが考える可謬主義とは、単に「今まで真であると思われてきたものが、後で偽であることが分かる可能性がある」というだけのものではない。
- それ以上の強い主張として、「世界の表面的状況だけではなく、〔パースのように自然法則に含まれる定数も含めて〕世界の構造＝实在そのものが可塑的である以上、これまで真だった知識が偽となる可能性を排除できない」として提示される。
- つまり、ある探究の時点において、ある知識（命題）が真であるのは、それが实在を正しく表象しているからであるが、その实在そのものが変化するならば、これまで真であった知識が偽となることに何の不思議もないと考えるのである。
- ちなみに、Laneは、パースが真理に関する表象主義的説明（＝真なる信念は实在する世界を表象している）を維持し続けていたと主張し、それをパースが後期になって放棄したと考えるミサク、フックウェイを批判するが(Lane 2018, p.136)、発表者もそれに賛同する。

可謬主義と「世界の可塑性」

- このような実在そのものが変化するという「世界の可塑性」の重視という思考の根底には、パースにおいては「進化論的宇宙論」(evolutionary cosmology, cf. Peirce 1992, Hausman 1993, 伊藤2006)と、それとセットとなっている「客観的観念論」(objective idealism)があり、ジェイムズならば『多元的宇宙』において展開される「可塑的な宇宙の自己表現としての哲学」というアイディア (cf. 大厩2022, pp.56)がある。
- 「・・・人間の知識は原理的に確実・確定的なものとはなり得ないという、知識に関する可謬主義と、この可謬性は単に認識論的反省による規定にとどまらず、一切の存在についての規定でもあるという、存在論上の主張である。彼の後期のプラグマティズムは、それゆえ、その形而上学的基礎に関して見れば、知識論上の可謬主義という原理を、単に認識の条件としてではなく、さらに存在論としても主張することによって成立する理論・・・」 (伊藤邦武『パースのプラグマティズム』1985年, p.6)

世界の可塑性から「客観性のダウングレード」へ

- 現代の哲学者たちには受け入れがたい考え方もかもしれないが、それを下敷きにすると、（これまた現代の哲学者たちにはあまり評判がよくない）「未来の理想的な共同体によって抱かれるであろうような意見が表象しているのが実在」というパースのテーゼも、現在の探究の対象が決して永続的である保証がない以上、この状態が続いていくと仮定して、理想的な共同体によって獲得可能なものとして実在および、それを表象している真理を定義することができる、という風に理解可能となる。
- この論点は、次の反懐疑論における「客観性のダウングレード」へとつながっている。

2-2. 反懐疑論における「客観性のダウングレード」

- 古典的プラグマティズムの主張する反懐疑論とは、未来になって実在が変容することに伴い、現在、真と見なされている知識が偽となる可能性があったとしても、現時点で疑う理由がない程度の意見の一致が得られているならば、それは十分な客観性を備えているのであり、それ以上の「客観性」を求めるのは過剰であるというものである。
- ここにはパースが強く賛同するトマス・リードらのスコットランド常識学派の影響が見られるが、「客観性」の基準を高く上げすぎてしまうと、その過剰さゆえに懐疑論を誘発すると考えてよい。
- つまり、探究の共同体で意見の一致が見られれば、それが「客観的である」ということであり、それ以上の審級を求めることは、旧来の「主観(的)／客観(的)」という枠組みに拘泥することに他ならず、プラグマティズムが忌避すべき姿勢であるとパースは考えたのである。
- ジェイムズが、もっとラフに客観性のダウングレードを認めることは『プラグマティズム』での議論を見れば明らかであろう。

- 旧来の「客観性」概念をダウングレードすることによって、「主観性／客観性」の境界を緩め、手に届く範囲**available**の真理や客観性が可能となる条件を探究したのが古典的プラグマティズムだと考えてよいのではないか。
- それでは、具体的にパースやジェイムズはどのような「主観性／客観性」の議論を展開したのか。
- 時間の制約があるため、ここでジェイムズの「根源的経験論」(radical empiricism)について簡単に触れ、時節においてパースの「ens rationisはときにリアルである」という発言の背景にあるものを明らかにしたい。

ジェイムズの「根源的経験論」(radical empiricism)

- ジェイムズは没後に刊行された*Essays in Radical Empiricism*(1912、加藤茂訳『根本的経験論』[白水社]、一部が伊藤邦武訳『純粹経験の哲学』[岩波書店]に収録)において、後にラッセルが『心の分析』(1921)で採用することになる「中性的一元論」(neutral monism)の原型となるようなモデルを提示している。
- 本論に係る議論としては第2論文「純粹経験の世界」(1904)が重要であり、そこでは、主体と客体がそこから分岐・生成する純粹経験(pure experience)によって世界が構成されていることが示される。
- さらに、主体や客体といわれるものは本質的に異なるものではなく、それぞれの純粹経験が果たす機能、言い換えるならば他の経験とつながる文脈によって、そう呼ばれているだけだと主張され、伝統的な「主観／客観」図式に異議を唱える。

3. 「ens rationisがときにリアルである」ということ

- パースは「ens [entia] rationisがときにリアルである」と主張することで伝統的な「主観／客観」図式に疑義を唱えていると発表者は考える。
- パースはens rationisを「思考上の存在」つまり、「思考にその存在を依存するもの」という意味で用いており、その点において「それ自身で存在するもの」としてのens realeと対比して使っている。
- さらにパースはens rationisは「実体化させる抽象」(hypostatic abstraction)によって産み出されると考える。
- この両者の関係については、**Aames 2021, Bellucci 2018[pp.244], Short 2007[pp.263]**などを参照のこと。またこの両者は事柄の性質上、一般者、可能性、あいまいさ(vagueness)の实在性を主張するパースの「スコラ的实在論」と関係が深いですが、それについては**Lane 2018**の106ページ以降を参照のこと。
- (なお、ここで発表者が行っている説明は、東京大学大学院の合同演習(2022年1月)で行った「タイプなきトークン」という口頭発表の内容を元にしてい

3-1. 実体化させる抽象と ens rationis

- 「実体化させる抽象の目覚ましい操作によって、われわれは **entia rationis** を創造することができるように思われる。その **entia rationis** は、思考上の存在であるにもかかわらず、ときに、それは実在する。その実体化する抽象は、それを通して物事を考えるものであった述語を、それについて考える主語へと転換する手段をわれわれに与えてくれる。」 (CP4.549)
- 具体的に「実体化させる抽象」とは次のようなプロセスを踏む。(以下、例と説明は **Short 2007, p.266** を参考にした。)
- 〈赤いボールが見える〉という知覚経験を元に「そのボールは赤い」 (The ball is red.) という言明がなされるとき、そこから「そのボールは赤さという性質を持っている」 (The ball has the property, redness.) という風に文章を変形することを通じて、「～は赤い」という述語付けの表現から「赤さ (という性質)」を実体化することを意味する。

3-2. 実体化させる抽象とアブダクション

- パースは、この実体化させる抽象を数学的思考の原理的エンジンとまで呼ぶが (CP.2.364)、しかし、それによって産出されたens rationisが「ときに」という制限はつくものの、実在する、つまりリアルであるというのは「思考に依存した存在」という、パースが通常用いるens rationisの定義に反するように思える。
- また、パースは「実在する」ということを「個々人の思考からは独立しているということ」(CP.5.408)と定義するが、それにも反しているように思える。
- というのも、私に赤いボールが見えるという知覚経験から「そのボールは赤い」という文を作り、それを「そのボールは〈赤さ〉という性質を持っている」と変形することまでは許されたとしても、それから「〈赤さ〉が実在する」を導くのは大きな逸脱だろう。
- このパース自身の主張とも矛盾しているように思える事態を解きほぐすには、実体化させる抽象と類似する思考の機能であるアブダクションと実在の定義を再検討する必要がある。

3-3. 探究の出発点としての実体化させる抽象、そして 実在の定義

- **Short**は実体化させる抽象をアブダクションの限定された形態とした上で、アブダクションが何らかの説明的な仮説を提供するのに対して、実体化させる抽象は説明を行うものではなく、説明を目指す探究の出発点に他ならないと主張する（Short 2007, 268）。
- すなわち、アブダクションは現象なり事実なりを説明する「命題」を提供するが、実体化する抽象は、その命題を構成する「主部」（主語 subject）をens rationisとして提供するのである。
- さらに、先のパースによる実在の定義には続きがある。全文をあげると以下のようなになる。
- 「実在は個々の人間の思考からは独立しているが、思考一般(thought in general)からは独立していない」(CP.5.408)
- この両者を組み合わせて、実際の探究のプロセスを次ページにあげてみたい。（例を「ボール」から「リンゴ」に変える。）

3-4. 探究のプロセスにおける主観的なものの変容

- (1) 〈赤いリンゴが見える〉：知覚経験
- (2) 「そのリンゴは赤い」：(1) の記述
- (3) 「そのリンゴは〈赤さ〉を持っている」：(2) の変形とそこに働く実体化させる抽象によって〈赤さ〉が実体化される。しかし、この時点での〈赤さ〉は個人の思考に依存しているens rationisであってリアルではない。
- (4) 同じく赤いトマトとリンゴが共通の酵素Rを持っていたことから、「リンゴを含む植物の赤さは酵素Rによるものである」という仮説が立てられる：〈赤さ〉の実体化させる抽象を経由したアブダクションによる仮説の形成
- (5) この仮説を検証するための探究が始まる。このとき、探究が個人ではなく、集団で行われることが通常であることに注意しなければならない。その(たいていは長い)探究の過程で、もはや疑う理由がないほどに「植物の赤さは酵素Rによるものである」という仮説について探究者の共同体で意見が一致したとき(cf. 「客観性のダウングレード」)、その意見(思考一般)によって表象されている対象は「実在する」と考えて問題ない。このとき〈赤さ〉は、あくまでも「思考一般」に存在を依存しているのでens rationisであり続けているが、しかし、同時に実在する、つまりens realeである。

4. 問題 — 「客観的観念論」をどう理解するか

- もし「**ens rationis**はときにリアルである」という主張を彼の他の主張と整合的に解釈しようとするならば、前ページのような探究のプロセスにそれを重ね合わせることが一つの解答となるだろう。
- そこでは、**ens rationis**という主観的なものが、その思考の主体が個人から集団（パース的には「限界を持たない探究者の共同体」）に変わっていくとはいえ、未だ主観的なものでありつつ、同時に、客観的な存在でもあるという構図が描かれる。
- このような形でパースは、旧来の「主観（性）／客観（性）」の枠組みに揺さぶりをかけようとしたと発表者は考えるが、もちろんそこには問題が山積している。
- 最も問題にされるのが、「思考一般」や「限界を持たない探究者の共同体」とは何か、そして、そこで多様な意見が収束していくという事態はどのように考えられるのかというもののだが、これについてはQuine（1960）からMisak([1991]2004)に連なるおびただしい議論が既になされているので、ここでは論じない。（この問題については石田 [2012] が明解な見通しを与えてくれる。また乗立 [2021] でもこの問題について触れた。）

4-1. おわりに：「客観的観念論」とは何か？

- 発表者が関心を持つのは、本発表の初めの方で述べた「世界の可塑性」の問題である。そのテーゼは「進化論的宇宙論」と、それとセットになった「客観的観念論」によって示されるとしたが、後者はパース自身によって次のように述べられる。
- 「宇宙についての一つの理解可能な理論は、客観的観念論(objective idealism)の理論である。それは、物質とは衰えた精神であり、凝り固まった習慣(habits)は物理法則になる、というものである。」(CP.6.25)
- あまりに荒唐無稽な主張のように思える（発表者自身も初めに見たときには驚いたし、未だに違和感が拭えない）し、ブランダムなどの現代のプラグマティストは即座に拒絶しそうだが、これを少しでも合理的に解釈する方向性は見出せないのだろうか。
- Laneも言うようにパースは物理法則と心的法則(mental laws)の区別を絶対的なものとは考えない（Lane 2018, p.77）という点が糸口になり得るのではないか。
- それと、今回示した「主観的なものが主観的なものでありながら、同時に客観的でもある」という図式を整合的に接続することの可能性を今後の課題としたい。

〔文献〕

- Peirce, Ch. S. *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, vols.1-8, Ch. Hartshorne, P. Weiss, A. Burks, eds. Cambridge, MA; Belknap Press of Harvard University Press, 1931-1958.
- Peirce, Ch. S. *Reasoning and the Logic of Things*, Cambridge(MA), Harvard University Press, 1992.
- 石田正人「C.S.パースの真理の収束説」、日本科学哲学会編『科学哲学 45-1』、2012年、47-63ページ。
- 伊藤邦武『パースのプラグマティズム』、1985年、勁草書房。
- 伊藤邦武『パースの宇宙論』、2006年、岩波書店。
- 伊藤邦武『プラグマティズム入門』、2016年、筑摩書房。
- 大厩諒『経験の流れとよどみ ジェイムズ宇宙論への道程』、2022年、晃洋書房。
- 乗立雄輝「命題の発話者とは誰か」、2021年、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室『論集』39.
- Aames, Jimmy「前切と実体的抽象化：パースにおける抽象の理論」、池田真治編『抽象の理論をめぐる哲学史—古代から近代まで—』（「抽象と概念形成の哲学史」研究会・研究報告論集）2021年。
- Belluci, Francesco. *Peirce's Speculative Grammar : Logic as Semiotics*. New York: Routledge, 2018.
- Hausman, Carl. R. *Charles S. Peirce's Evolutionary Philosophy*. Cambridge, Cambridge University Press, 1993.
- Lane, Robert. (2018). *Peirce on Realism and Idealism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Misak, Cheryl J. ([1991]2004). *Truth and the End of Inquiry. A Peircean Account of Truth*. (expanded paperback edition [2004]). Oxford: Oxford University Press. Quine, Willard van Orman. (1960). *Word and Object*. Cambridge, MA: The MIT Press. (大出晁、宮舘恵訳『言葉と対象』、1984年、勁草書房。)
- Short, T. L. *Peirce's Theory of Signs*. Cambridge, Cambridge University Press, 2007.